



2004年4月発行

### 見ずして信じる者の幸い

「役人は、『主よ、子供が死なないうちに、おいでください』と言った。イエスは言われた。『帰りなさい。あなたの息子は生きる。』その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。ところが、下って行く途中、僕たちが迎に来て、その子が生きていることを告げた。」

(ヨハネによる福音書4章49~51節)

主イエスがガリラヤのカナに滞在しておられた時、カファルナウムに住んでいた王の役人が、主イエスを訪ねて来ました。王の役人とは、ガリラヤの領主ヘロデ・アンティパスに仕えていた家臣のことで、彼自身、その地方では相当に名のある人物だったと思われます。日頃は、王の権力を笠に着て、自信満々、肩で風を切って生きていたのでしょう。しかしそんな彼が、息子の大病、それも瀕死の状態に陥ったことで、詮方尽き、沽券も気位も何もかも捨てて、藁をも掴む思いから、30キロの道程を自ら足を運び、主イエスの許にやって来たのです。彼は、「今すぐカファルナウムに来て、息子をお癒してください」と、主イエスに必死になって懇願しました。ところがこの時、主イエスの口からは意外にも、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と、素っ気無い言葉が返ってきました。「あなたが求めているのは奇跡であって、私自身ではない」、と言われたのです。奇跡を求める信仰は、願いが叶えば叶ったで、感謝はその時だけ、恐らく、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」、と言うことにしかならないだろうし、願いが叶わなければ、失望と不平不満しか後には残らないだろう。いずれにしても、そこには真の信仰など生まれようがないと、主イエスは暗に諭されたのです。

しかしこの役人の偉かったのは、ここで諦めなかったことです。役人は更に、「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」、と懇願し続けました。ここに至って主イエスも亦、

本気でこの役人と向かい合われました。主イエスは、役人が願ったような仕方ではなく、むしろ願った以上に、それよりも遥かに勝った仕方でお応えになりました。「あなたの息子は生きる」、と言われた主イエスのお言葉を、役人が信じ、信じて帰途についた時、既に息子の病は癒されていたからです。役人は、奇跡を見て信じたのではなく、先ず主イエスのお言葉を信じ、信じて歩き出した時に、彼が願った以上のことが起こってきたのです。彼は、「見ないのに信じる人は、幸いである」(ヨハネ 20:29)、と言う真の信仰による真の幸いに与かったのです。その幸いは彼一人に留まらず、家族にも及ぶことになりました。

ところで、ここで起こった癒しの奇跡は、単なる奇跡ではなく、“しるし”であったと言われます。主イエスこそは、死を滅ぼし、永遠の命をお与えくださる、真の命の賦与者です。単なる病気の癒しならば、その時は助かっても、人は皆いずれ必ず死ぬのですから、只悲しみを先延ばしにただけのことにしかなりません。しかしあの息子は、そしてあの役人は、キリストを信じて、たとえ死んでも生きる命を与えられたからこそ、その喜びは大きかったのです。

面白いことに、これまでずっと役人、役人と呼ばれてきた人物は、キリストを信じたその時から、「その人は」とか、「この父親は」と呼ばれ出し、最早肩書きでは呼ばれなくなりました。彼はこの時から、肩書きではなく、素の人間として生き始めたと言うことなのでしょう。

牧師 三輪恭嗣

(2004年2月15日の主日礼拝の説教より)



イースターエッグ